

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.222

2011年11月

第7回名古屋大学ホームカミングデイを開催



目次

●ニュース

第7回名古屋大学ホームカミングデイを開催	3
柴田日本ガイシ相談役に本学名誉博士の称号を授与	7
赤崎本学特別教授が文化勲章を受章	7
東海地区国立大学法人の事務連携に関する協定書の調印式を挙行	8
平成23年度名古屋大学公開講座を開講	9
中川文部科学大臣が本学を視察	10
濱口総長が第7回日中学長会議に出席	10
京都銀行と産学連携に関する協定を締結	11
講演会及び意見交換会「わが国の科学技術イノベーション政策の今後の展望と大学の役割」を開催	11
平成23年度大学院秋季修了式を挙行	12
平成23年度秋季入学式を挙行	12
「インターナショナルレジデンス妙見」竣工記念式典を挙行	13
NUPACE 設立15周年記念行事を開催	13

●知の先端

新たな地球像の創造	14
伊藤 武男（大学院環境学研究科助教）	

●世界につながる

グローバル30ー留学生を迎え本格始動ー	16
渡辺 芳人（副総長（研究・国際企画関係担当））	

●知の未来へ

資源小国日本に豊富に存在するヨウ素を有効利用した環境調和型不斉合成	18
UYANIK Muhammet（ウヤヌク ムハメット）（大学院工学研究科助教）	

●部局ニュース

公開講演会「蛍光タンパク質の発見と生命科学研究への応用」を開催	19
第12回ミュンスター大学・名古屋大学共同セミナーを開催	19
土木系教室50周年記念行事を開催	20
新生児集中治療室及び回復治療室の内覧会を開催	20
解剖弔慰祭を挙行	21
ICCAE 2011年度第5回オープンセミナーを開催	21
ICCAE 第12回オープンフォーラムを開催	21
ミクロの探検隊を開催	22

●名大を表敬訪問された方々

●新たに締結した学術交流協定	23
----------------	----

●構成員を対象とした研修

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成23年9月16日～10月15日	25
----------------------------------	----

●博物館からのお知らせ

名古屋大学創基140周年記念展示	28
------------------	----

「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』ー解剖学創始者のミュージアム」

●イベントカレンダー

●ちょっと名大史	29
----------	----

竹下重人と名高商行政文書

32

第7回名古屋大学ホームカミングデイを開催





- 1 エントランスに設置されたバルーン
- 2 国際交流貢献顕彰授与式の様子
- 3 名古屋大学の集いの司会を務めた浦口アナウンサー
- 4 名古屋フィルハーモニー交響楽団の演奏の様子

第7回名古屋大学ホームカミングデイが、10月15日（土）、東山キャンパス及び大幸キャンパスにおいて開催されました。

当日は、あいにくの雨天にも関わらず、同窓生や在学生の家族、近隣住民の方々を中心におよそ4,000名の参加がありました。

今年度は、未来を耕す「人・緑・食」をメインテーマとし、大学院生命農学研究科を中心部局として開催しました。昨年同様、当日の運営には学生も加わり、名大祭本部実行委員会や水泳部、陸上部に所属する多くの学生と教職員とが力を合わせ、総合案内、会場整理などの業務にあたりました。

■名古屋大学の集い

今年7月に国の登録有形文化財に指定された豊田講堂では、周年記念同窓生（卒業後10周年、20周年、30周年、40周年、50周年）の方々を中心とした多くの関係者の参加のもと、教育学部卒業生の浦口史帆東海テレビ放送アナウンサーの司会により「名古屋大学の集い」を開催しました。



第1部では、濱口総長、太田和宏名古屋大学全学同窓会顧問からのあいさつ、伊藤義人同代表幹事からの活動報告及び名古屋大学国際交流貢献顕彰授与式が行われました。国際的人材群創出のさらなる促進を目的として昨年度設立された同顕彰は、カリド・ラシド氏、楊立氏、アピナン・スプラサート氏の3名に贈られ、当日出席したカリド氏とアピナン氏に表彰状と記念品が授与されました。

続く第2部では、名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンサートが行われ、チャイコフスキー作曲のヴァイオリン協奏曲やベートーヴェン作曲の交響曲第7番等が演奏されました。

周年記念同窓生への招待状の送付は昨年度から開始しましたが、来年度に周年記念を迎える同窓生の方から次回の行事についての照会があるなど、10年に一度の招待が定着しつつあります。

なお、名古屋大学基金に対する高額寄附者（100口以上）の方で参加を希望された方には、ご支援に対し感謝の意を表するため、指定席を用意しました。





■学術講演会

シンポジオンホールでは、今年度のテーマに基づき、学術講演会「明日を拓く『人・緑・食』」を開催しました。

農学部卒業生の島川未有 JRT 四国放送アナウンサーの司会のもと、服部生命農学研究科長がコーディネータを務め、生源寺真一生命農学研究科教授から「世界の食料・日本の農業」、芦荻基行生物機能開発利用研究センター教授から「名大ブランドスーパーライス育成へ向けて!」、下村吉治生命農学研究科教授から「食と健康：生活習慣病予防のための食事と食べ方」と題した講演が行われました。

人類の持続的成長に不可欠な「食・環境・健康」の基盤が揺らぎつつある現代において、これからの人材育成や科学技術の方向性はどうか、地域の方々とともに考える時間となりました。

また、シンポジオンホールと隣接するアトリウムでは、大学院生命農学研究科の研究を紹介するポスターの展示が行われ、テラスでは、同研究科附属フィールド科学教育研究センター東郷フィールドで飼育されている親子のヤギなどと触れ合えるコーナーが設置されました。

■体験企画「名大東山キャンパス雑木林の

生物多様性を観察しよう！」

雑木林の散策と東山キャンパス内で見ることのできる樹



木、昆虫、鳥のパネル展示を行う「名大東山キャンパス雑木林の生物多様性を観察しよう！」を、好評につき今年度も開催しました。特に雑木林の散策は大変多くの方から事前の申し込みがあり、抽選により参加者を決定するほどの人気を博しました。

雨のため、雑木林の散策の1回目は、野依記念学術交流館内のホールでの説明となりました。本学教員が、実際の散策コースで採取した樹木の葉やどんぐり等を示しながら、本学の敷地内で観察できる自然環境について解説しました。雨のあがった2回目からは、参加者が携帯サイズの「雑木林マップ」を片手に、本学教員と大学院生のガイドを聞きながら約1時間かけてキャンパス内を散策し、樹木や草などを観察しながら地域の環境について学び、地球環境について考えました。

野依記念学術交流館1階では、「雑木林の生物多様性」と題し、散策コースで観察できる樹木、散策コースに生息する昆虫や鳥、本学の記念樹などに関するポスター展示が行われました。

■体験企画「名大ウォーキングツアー」

島岡 清本学名誉教授の監修のもと、ウォーキングにより健康管理を意識しながら、ツアー形式で東山キャンパス内を散策する企画を実施しました。在学生による案内のも





と、参加者は豊田講堂をスタートして、赤崎記念研究館やノーベル賞展示室など、東山キャンパス内にある教育研究施設や見どころスポットを見学しました。

今年は91歳というご高齢の方も参加され、ゆっくり歩くことで本学の今を感じてもらうことができたようです。

■体験企画「科学実験を体験しよう！」

野依記念学術交流館1階カフェスペースでは、本学の理系女子学生で構成されるコミュニティ「あかりんご隊」による、小学生から高校生を対象とした科学実験体験企画が開催されました。今年は、化学反応を利用した人工スライムをつくる実験などを行いました。参加者は、学生たちの手元を熱心にのぞき込んでいました。

■体験企画「スポーツ行事」

陸上競技場では、名古屋グランパススクールコーチによる親子ふれあいサッカー教室が行われました。

名古屋グランパスは、名古屋市を中心に地域に根ざした愛されるクラブづくりを理念として掲げており、その方向性はホームカミングデイの「知識基盤社会」の中核として地域貢献の使命を果たすという目標と合致しています。

昨年度に引き続き多数の応募がありましたが、名古屋グランパスの好意により予定人数を超えて申込者を受け入



れ、参加者は雨の上がった陸上競技場で、楽しく汗を流しました。

■多彩な講演会・展示の数々

メインテーマに沿った学術講演会・展示に加えて、各学部・大学院が主催する催しも数多く行われました。

大学院法学研究科では、同日、名古屋大学名誉博士の称号を授与された柴田昌治日本ガイシ株式会社相談役による講演会が開催され、柴田相談役は、「グローバル化の中の日本の国際競争力-若者へのメッセージ」と題し、グローバル化が急速に進む中での日本の国際競争力や、学生が身につけるべき能力について話しました。

野依記念学術交流館2階大会議室では、環境医学研究所による市民公開講座「癌の新たな治療戦略」が開催され、学内外から5名の講師を招き、「大腸がん：早期発見のすすめ」と題した講演やパネルディスカッションが行われました。

附属図書館では、秋季特別展「そろばんと和算書-日本の計算文化にふれる-」、図書館スタンプラリー、図書館体験・見学ツアー等が開催されました。

博物館では、企画展「ミクロの美術館」、現役学生による博物館ガイドツアー、西側キャンパスにある野外観察園見学会など、様々な行事が行われました。



1	2	5	6
3	4	7	

- 1 学術講演会「明日を拓く『人・緑・食』の様子
- 2 ヤギと触れ合えるコーナーの様子
- 3 体験企画「名大東山キャンパス雑木林の生物多様性を観察しよう！」の様子
- 4 野依記念学術交流館での音楽演奏の一幕
- 5 体験企画「科学実験を体験しよう！」の様子
- 6 サッカー教室で汗を流す参加者
- 7 環境医学研究所市民公開講座「癌の新たな治療戦略」の様子



また、名古屋大学創基140周年記念展を豊田講堂アトリウムで開催し、創基当初の歴史に関わる貴重な資料を展示しました。

■その他趣向を凝らしたイベント

豊田講堂南側ピロティの販売コーナーでは、本のリユース市、大学生協による名大グッズ等の販売が行われました。

また、昨年度導入し、行列ができるほどの人気だったベロタクシー（自転車タクシー）を今年度も運行しました。ホームカミング日の1週間前には、ホームカミング日のガイドブックと同じデザインのラッピングを施したベロタクシーが名古屋の街を走り、広報活動にも一役買いました。ホームカミング日当日には、雨の影響で運行開始が1時間ほど遅れるというアクシデントもありましたが、学内をゆったりと移動するベロタクシーの姿は、環境に配慮する本学らしい光景でした。

■同窓会、保護者等対象企画行事、施設公開

各学部・大学院の同窓会関係行事についても例年どおり行われました。講演会も多数開催され、同窓生だけでなく、在学生の保護者や一般市民の方々にも開放されました。その他、同窓会ならではの行事も数多く行われ、キャンパス内で学生時代の思い出等を語り合う同窓生の姿が多く見受



けられました。

また、教育・研究をはじめとする現在の本学の取り組みをご理解いただくため、保護者等を対象とした企画行事も多数開催されました。13の学部・研究科において、教育目標・教育課題や進路・就職状況等に関する説明や、教員と保護者との面談形式での相談会などがそれぞれ趣向を凝らした内容で行われました。保護者等対象企画行事に参加した方には、日頃学生が食べている食事を体験してもらうという趣旨から、大学生協の無料食事券が配布されました。

さらに、超高压電子顕微鏡施設、2008ノーベル賞展示室、情報基盤センター、野依記念物質科学研究館、赤崎記念研究館では、施設公開や見学ツアーが開催され、参加者は、普段目にする事のない大学の設備、施設を間近に見学していました。



1	2
3	

- 1 学内をゆったり走るベロタクシー
- 2 超高压電子顕微鏡施設見学ツアー
- 3 2008ノーベル賞展示室

柴田日本ガイシ相談役に本学名誉博士の称号を授与

柴田昌治日本ガイシ株式会社相談役に対する名古屋大学名誉博士の称号授与式が、10月15日(土)、総長応接室において、挙行されました。本学名誉博士の称号は、過去16名の外国人研究者に授与されてきましたが、日本人としても、研究者以外としても、今回が初めての称号授与となりました。



総長(右)から名誉博士記を授与される柴田相談役(左)

柴田相談役は、昭和34年3月に本学法学部を卒業後、日本ガイシ株式会社に入社、同代表取締役社長、会長等を歴任し、電力関連事業、セラミックス事業等の分野で国内外の経済発展に寄与しました。また、社団法人日本経済団体連合会副会長も務め、企業の価値創造力の強化あるいは地域の活力の向上を促す牽引役となるばかりか、財政制度等審議会委員や労働政策審議会委員として、国家行政の中枢に関わる重責も担ってきました。一方で、柴田相談役は、財団法人NGK留学生基金を設立し、地元大学の外国人留学生への奨学金の給付等を行うほか、建設費約5億円を投じて外国人留学生のための宿泊施設「NGK インターナショナルハウス」を建設するなど、留学生支援をはじめとする地域貢献活動にも力を入れてきました。

名誉博士の称号授与にあたり、濱口総長から、柴田相談役のこれまでの広範かつ多岐にわたる永年の社会貢献活動及びそれに対する国内外からの高い評価は他に代え難いものであり、また、本学経営協議会委員でもある柴田相談役からその豊富な経験に基づき大所高所からの貴重な助言を得ることは、企業と大学との連携推進あるいは本学の教育研究活動の活性化等に資するという意味において極めて意義深いとの言葉がありました。

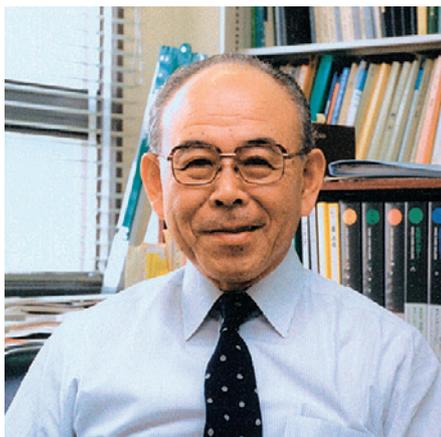
赤崎本学特別教授が文化勲章を受章

平成23年文化功労者・文化勲章受章者が発表され、本学関係者では赤崎 勇本学特別教授が文化勲章を受章しました。

文化勲章は、科学技術や文化の発展・向上に顕著な功績があるものに授与される勲章で、今回の受章は、20年にも及ぶ粘り強い継続的な研究活動により、高輝度青色発光ダイ

オードを世界で初めて実現し、その実用化に貢献したことによるものです。

文化勲章親授式は、11月3日(木)、皇居宮殿松の間において行われました。



赤崎特別教授



青色LEDの光る豊田講堂時計台

東海地区国立大学法人の事務連携に関する協定書の調印式を挙

東海地区国立大学法人の事務連携に関する協定書の調印式が、9月27日(火)、鶴舞地区にある鶴友会館において挙行されました。

東海地区国立大学法人事務連携ネットワークと称する同連携は、東海地区の国立大学法人8法人が、それぞれのリソースや特色を活かして、同地区の国立大学全体として教育研究・社会貢献活動を積極的に展開していくため、その基盤を支えている事務部門の連携を図る目的で創設されました。これは、中央教育審議会の「中央教育審議会大学分科会の審議経過と更に検討すべき課題について」(平成23年1月19日)において「大学間連携の推進」が取り上げられ、また、国立大学協会の「国立大学の機能強化－国民への約束－(中間まとめ)」(平成23年6月22日)においても、国立大学の「事務処理等の共同化」が提唱されていることを踏まえたものです。

調印式には、森 秀樹岐阜大学長、伊東幸宏静岡大学長、中村 達浜松医科大学長、松田正久愛知教育大学長、高橋 実名古屋工業大学長、榊 佳之豊橋技術科学大学長、内田淳正三重大学長、濱口総長の同ネットワーク参加



署名した協定書を掲げる各学長

大学の全大学長が出席し、協定書に署名しました。

また、会場には中日新聞社、NHKをはじめとする報道機関9社が取材に訪れ、関心の高さがうかがわれました。

協定書締結後には記者会見が行われ、全学長を代表して濱口総長が、新しい時代の大学をどう描いていくかが見えない中で、それぞれの大学が単独で悩んで解決できる状況ではなく、東海地区4県の国立大学という大きな枠組みで協議しながら前に進む道を見据え、情報交換をしつつ、できることから進めていきたい旨を表明しました。続いて、他の学長も期待や抱負を述べ、報道機関からは多くの質問が寄せられました。

その後、第1回東海地区国立大学法人事務連携協議会が開催され、連携内容について、今後研修をはじめとする12項目から検討し、先行事例等を踏まえ連携可能な事項から順次実施していくこととなりました。



記念撮影



記者会見の様子

平成23年度名古屋大学公開講座を開講

平成23年度名古屋大学公開講座が、8月18日(木)から10月20日(木)までの間、シンポジオンホールにおいて開講されました。この公開講座は、本学の研究成果を広く一般に紹介することを目的に毎年開講されており、今年で42回目となります。

今年度は、総合テーマを「夢見た今と夢見る未来」とし、全15回の講義が行われました。今回のテーマは、私たち20世紀に生まれ育った者にとって夢に見た21世紀が、鉄腕アトムのようなロボットが闊歩し、宇宙旅行が実現するなどのバラ色の世界であったのに対して、21世紀に入って10年が経った今、日本はもちろん世界各国も様々な問題に直面し、決してバラ色の世界とは言えない現実の世界で、将来への夢を失っている現状を変えて、もう一度未来に対する希望を持つことを目的としたものです。

講義では、20世紀の人々が夢見ていたことが現在どの程度まで実現できたのかを振り返りながら、今、科学者は何を夢見て研究を進めているのか、そうした研究が未来をどのように切り拓いていくのかなどについて、文系、理系、医学などの様々な分野で最先端の研究をしている本学教員



会場の様子



表彰された参加者の記念撮影

が解説しました。講義終了後には、受講者から講師を務めた教員に対して多数の質問が投げかけられるなど、関心の高さがうかがわれました。

10月20日(木)に行われた閉講式では、受講者145名のうち10回以上出席した116名の代表者に対し、家森社会連携室長から修了証書が手渡されました。平成19年度から、公開講座の受講者に対する表彰制度を導入しており、平成10年度以降の受講者で、5年以上参加した方10名には表彰状が、10年参加した方1名には表彰状と記念品が授与されました。

なお、参加者の多様化を図るとともに高校生に本学への関心を持って頂くため、昨年度から学生の受講については受講料を無料とする試みを始めており、今年度も近隣の高等学校に対して案内をしたところ、3校から計11名の参加を得ました。

また、開講に先立ち、7月3日(日)から9月4日(日)の毎週日曜日には、東海ラジオからラジオ放送公開講座「名古屋大学リレーセミナー」として、全10回の放送を行いました。

中川文部科学大臣が本学を視察

中川正春文部科学大臣が、10月3日(月)、磯田文雄文部科学省高等教育局長、吉田統彦衆議院議員らとともに本学を訪問しました。中川大臣は、下村 脩本学特別教授と若手研究者との懇談会に参加したほか、本学のグローバル人材育成の取り組みについて視察し、濱口総長をはじめとする関係者と意見交換を行いました。



国際プログラム群の授業を見学する中川大臣一行

中川大臣は、まず、米国より一時帰国し本学を訪問していた下村特別教授と、本学が若手研究者の育成を目的に取り組んでいる YLC (Young Leaders Cultivation) プログラムに採用されている若手研究者や近藤高等研究院長ら関係教員による懇談会に参加し、世界最高水準の研究や研究者の育成を可能にする仕組みづくりについて活発な意見交換を行いました。

続いて、総長、山本理事、高橋理事、渡辺副総長らと本学における世界に通じる人材育成について意見交換を行い、国際化拠点整備事業(G30)採択校としての取り組みや、アカデミックイングリッシュの習得を目標としたカリキュラムについて話し合いました。

その後、G30の一環として今年10月より始まった国際プログラム群の授業を見学し、G30の教員及び学生代表との懇談、日本語教員及びアドミッションオフィス教員等との意見交換を行いました。

最後に、法政国際教育協力研究センター及び日本法教育研究センターについて説明があり、教員及び留学生代表と懇談を行いました。

濱口総長が第7回日中学長会議に出席

濱口総長は、10月12日(水)、13日(木)の2日間、京都国際会議場において、第7回日中学長会議に出席しました。

同会議は、東京大学と北京大学が幹事校となり2年毎に日本と中国で交互に開催されているもので、今回は京都大学と立命館大学がホスト校を務めました。日本からは、本学をはじめ17大学のほか、文部科学省、日本学術振興会、



集合写真

日本学生支援機構、大学評価・学位授与機構が、中国からは16大学のほか駐日中国大使館、駐大阪中国総領事館が参加し、合計約140名が出席しました。

12日(水)は、レセプションが行われ、濱口総長は各参加機関代表と意見交換をしました。

13日(木)は、まず、城井 崇文部科学大臣政務官、白 剛駐日中国大使館公使参事官、袁 自煌駐大阪中国総領事館教育室長、安西祐一郎日本学術振興会理事長(星野有希枝国際事業部地域交流課長代読)からあいさつがあり、続いて磯田文雄文部科学省高等教育局長が基調講演を行いました。その後、分科会1「大学の質向上」と分科会2「大学の国際化」に分かれて各参加大学からの発表及び議論が行われ、総長は分科会1に出席しました。

分科会後は、各分科会からの報告をもとに全体で議論が行われ、大学の質向上、大学の国際化、優秀な人材の確保・育成の重要性について活発な議論が行われました。最後に、日中学長会議の運営に関する協議が行われ、次回は、中国の厦門大学がホスト校となり厦門市で開催されることとなりました。

京都銀行と産学連携に関する協定を締結

株式会社京都銀行との産学連携に関する協定締結式が、9月20日(火)、豊田講堂特別会議室において挙行されました。

締結式では、宮田理事及び高崎秀夫京都銀行代表取締役頭取があいさつを述べ、連携への期待を確認しあつた後、協定書を取り交わしました。



協定書を取り交わした宮田理事(左)と高崎頭取(右)

同銀行は、今年4月11日に名古屋支店を開設するなど業容拡大を図っており、同協定は、本学の学術研究の成果と同行が保有する新規事業に関する企業情報とを用いて産学連携を推進し、地域経済の活性化及び学術研究の発展に寄与することを目的として締結されました。

本学が保有する技術シーズ(種)や産学官連携推進本部の機能を広く紹介し、技術相談、共同研究や受託研究等を希望する取引先を発掘することが併せて期待されます。

なお、本学が近畿地方の金融機関と産学連携に関する協定書を締結するのは、今回が初めてとなります。

講演会及び意見交換会「わが国の科学技術イノベーション政策の今後の展望と大学の役割」を開催

講演会及び意見交換会「わが国の科学技術イノベーション政策の今後の展望と大学の役割」が、9月26日(月)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて開催されました。

これは、相澤益男総合科学技術会議議員を講師に迎え、「第4期科学技術基本計画」に基づいて本学が今後果たし

ていくべき役割について考えることを目的に開催されました。同計画は今年8月に閣議決定され、相澤議員はその策定に際し中心的な役割を担いました。

講演会では、同計画の策定の背景やその理念についての紹介にはじまり、今後目指すべき国の姿や、将来にわたる持続的な成長と社会の実現に向けた科学技術イノベーション政策の重点課題等について説明がありました。

また、同計画を推進するためにも基礎研究と人材育成の強化は重要であり、その役割を担う機関として大学に大きな期待を寄せている旨、激励の言葉が述べられました。

意見交換では、濱口総長をはじめ多くの教職員から意見や質問が挙がり、活発な意見交換が行われました。

大学教職員を中心に約100名が参加し、今後の教育研究推進の参考になる会となりました。



講演する相澤議員

平成23年度大学院秋季修了式を挙行

平成23年度名古屋大学大学院秋季修了式が、9月27日(火)、豊田講堂において挙行されました。今年度の秋季大学院修了生は、修士課程及び大学院博士課程前期課程27名、医学博士課程及び博士課程後期課程34名の計61名となりました。

修了式では、濱口総長から各研究科の修了生代表に学位



記念撮影

記が授与され、次いで、本学における課程を修了したことへのお祝いの言葉と、本学において学んだ知識や技術をさらに研鑽し、世界の発展のために貢献することを希望する旨のはなむけの言葉が贈られました。

これを受けて、修了生を代表して大学院環境学研究科の高塚真央さんから、修了生一同は専門分野こそ異なるが、本学における研究を基礎とし、これを発展させ、また、本学で培われた「試練を乗り越えていく力」を基に、日本における東日本大震災からの復興のみならず、世界で起きているあらゆる問題に対して立ち向かっていかなければならない、と総代の辞として力強い言葉が述べられました。

平成23年度秋季入学式を挙行

平成23年度名古屋大学秋季入学式が、10月5日(水)、豊田講堂において挙行されました。

今年度の秋季入学生は、大学院124名(修士課程及び博士課程前期課程39名、医学博士課程及び博士課程後期課程85名)、学部37名の総勢161名となりました。新入学生には、留学生特別コース、大学院医学系研究科修士課程医科学専



式典会場の様子

攻医療行政コース(Young Leaders Program)等の留学生の他、国際プログラム群に入学する留学生も含まれています。

国際プログラム群は、国際化拠点整備事業(G30)の一環として、今年10月より学部5プログラム、大学院6プログラムで開始しました。全ての授業が英語で行われるため、英語のみで卒業し学位を取得することが可能です。大学院にはこれまでも英語のみのコースが存在していましたが、学部では初の試みで、学部生の秋入学も今年度が初めてとなりました。

名古屋大学交響楽団が演奏するパッヘルベル作曲の「カノン」で始まった式典では、濱口総長から英語で祝辞が述べられ、続いて役職員等の紹介がありました。その後、国際プログラム群に入学した法学部のヤクボワ ディラフルズ ディルショドフナさん(ウズベキスタン)が、入学生総代として、入学にあたって学生としての本分を全うすることを宣誓しました。

式典終了後は、豊田講堂内で記念撮影をする入学生の姿が見られました。

「インターナショナルレジデンス妙見」 竣工記念式典を挙

国際交流会館「石田記念名古屋大学インターナショナルレジデンス妙見」の竣工記念式典が、9月15日(木)、同施設のある名古屋市昭和区妙見町において挙

行されました。単身室93戸を擁する同施設は、財団法人石田財団の寄附を受けて創設され、昨年3月に竣工したインターナショナルレジデンス山手に引き続き、本学の外国人留学生専用宿



記念撮影

舎としては4つ目となります。式典には、同財団の関係者並びに本学からは濱口総長をはじめ各理事・副総長、部局長、留学生関係教員等約60名が出席しました。

はじめに、総長から、インターナショナルレジデンス東山が竣工した昭和57年当時150名程度だった留学生数が、現在では世界76カ国・地域から1,500名を超えていること、今後国際化拠点整備事業(G30)の採択大学として態勢整備を図る上で時宜を得た竣工となったこと、さらに、隣接するインターナショナルレジデンス山手及び国際嚶鳴館を含む当地区でのキャンパスの国際化が一層進展することを大いに期待していることなど、祝意を込めたあいさつがありました。

続いて、小山由紀同財団理事長が、同施設が本学の日本人学生と留学生の交流拡大に寄与すること、さらには本学と世界との架け橋となることを祈っている旨のあいさつを述べ、奥村施設管理部長が、同施設の設計趣旨・方針、構造・規模、機能面での特徴などの施設概要を説明しました。

その後、総長並びに小山理事長の2名により同財団創設者の故石田退三氏の肖像画の除幕式が行われ、和やかな雰囲気の中で式典を終了しました。

NUPACE 設立15周年記念行事を開催

名古屋大学短期交換留学受入れプログラム(NUPACE)設立15周年記念行事が、10月14日(金)、15日(土)の2日間、国際開発研究科オーデトリウム及び留学生センターにおいて開催されました。

初日は、まず宮田理事が開会のあいさつを行い、続いて水畑順作文部科学省高等教育局学生・留学生課課長補佐から来賓あいさつと文部科学省における留学生政策について話題提供があり、それを受けてパネルディスカッションが



集合写真

行われました。

パネルディスカッションの第1部では、パネリストにフライブルク大学国際交流室のベンジャミン・ゲーリング氏、高麗大学国際交流室のパク・チョンユン氏、近藤佐知彦大阪大学教授・短期留学プログラムコーディネーターを迎え、「交換留学政策とプログラム—今日的課題への新たなアプローチ」と題して行われました。第2部では、NUPACE同窓生3名と交換留学を経験した本学卒業生3名が、交換留学が自分の人生に与えた影響について語りました。

2日目は、NUPACE同窓生であるジェームズ・マスターソン米国モアヘッド州立大学州立大学講師が、「21世紀における日中関係」と題した学術記念講演を行い、続いて、パネルディスカッションの第3部では、様々な出身地のNUPACE同窓生7名からNUPACE参加前と後の日本に対するイメージが語られました。その後、同窓会イベント、パーティが催され、学生達同士あるいは先生と学生との間の旧交を温めました。

全体を通じての参加者数は約100名近くを数え、今回参加できなかった海外の同窓生からも写真やメッセージがありました。

新たな地球像の創造

伊藤 武男 大学院環境学研究科助教

地球の内部構造を知るためには何をすれば良いのでしょうか？ 一般的には、大きく分けて2つの方法があります。1つめは、地震波トモグラフィと呼ばれる地震波の伝わる速度を可視化する方法です。この方法では地球内部構造がわかったように思えますが、実際には地震波の伝わる速度を観測データとしているため原理的に媒質の弾性定数や密度の情報を得ることはできません。2つめは、大きな地震が発生した後の地球の固有振動現象を調べる方法です。これは地震が地球全体を振動させる事に着目する解析手法です。例えば、この手法は、地震がハンマー、地球は鐘だとすると、ハンマーで鐘を叩いて音色を聴くことで鐘の構造や鐘を構成する物質の基本的な性質を調べることと同じです。しかし、この手法では地球の平均的な構造等はわかりませんが、数100km程度のスケールの構造はわかりません。つまり、我々は足下の地下構造については、構成する物質の基本性質をほとんど知らないのです。

一方、数100km程度のスケールで地球を構成す

る物質の基本性質を知ることは、とても重要です。近年、巨大な地震が世界各地で発生しています。これらの地震は海嶺で生成された海洋性プレートが大陸地殻の下に沈み込むことで地殻にひずみが蓄積し、そのひずみに耐えきれなくなった時に地震という現象として、ひずみが解放されます。しかし、海洋性プレートが海嶺から何千キロも渡って移動するためには、海洋性プレートの下に潤滑油のような性質をもつ構造が必要です。私は海洋性プレートの下構造を調べるために、海洋潮汐を使って推定する新たな手法を開発しました。

海洋潮汐とはあまり聞き慣れない言葉ですが、月や太陽などの地球外の天体の引力によって生じる潮汐力によって海水が移動する現象です。これは、いわゆる潮の満ち引きで、海面が一日に2回上下する、とても身近な現象です。海水の満ち引きは海洋潮汐モデルによって正確に予測可能で、このことは海水の移動が把握できる事を意味します。例えば、図1は12.42時間周期を持つ世界中での潮の満ち引きの振幅を示しており、空間的に

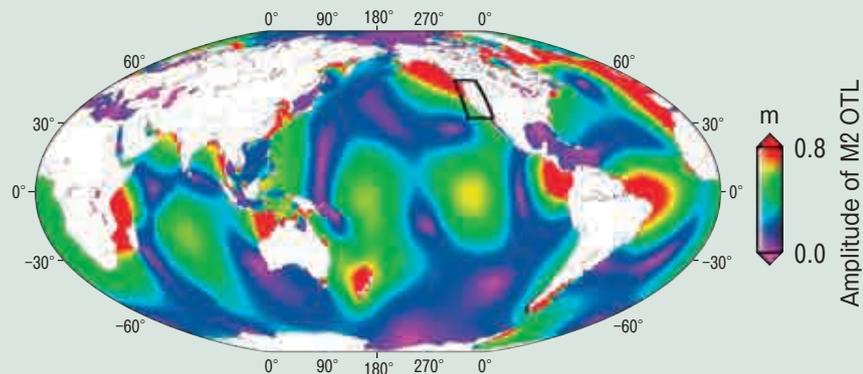


図1 12.42時間周期の海洋潮汐の振幅の空間分布。黒い四角は今回の研究対象域を示す。

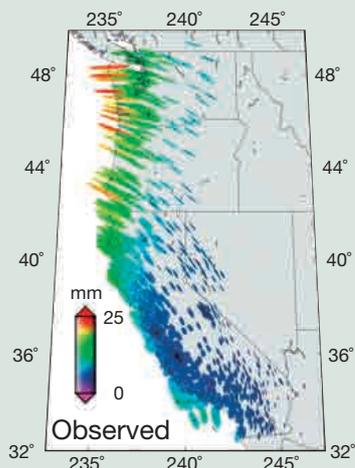


図2 北アメリカの西海岸におけるGPS解析によって得られた12.42時間周期の海洋潮汐によって生じる変位分布。楕円形の形は変形パターンを示している。

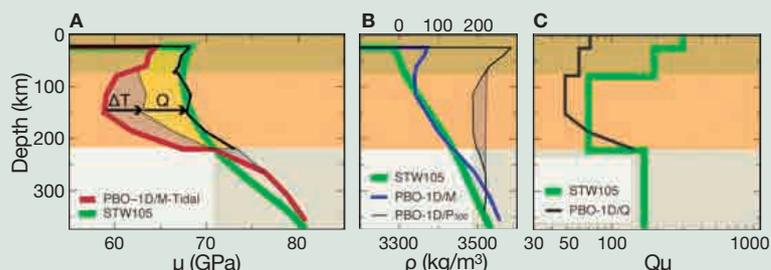


図3 海洋潮汐荷重とGPSによって推定された構造分布。PBO-1Dモデルが海洋潮汐とGPSから推定された構造。STW105は全地球モデル。
A：剛性率を示す。温度の補正が灰色の領域、減衰(Q)の補正が太い黒線。B：密度を示す。密度の圧力補正後が細い黒線。C：減衰を示す。

不均質な分布をしていることがわかります。この毎日繰り返される大量の海水の移動は地殻を変形させ、我々はその地殻の変形を北アメリカ大陸の西部地域に設置されている約700点のGPS観測網を用いて0.1mm程度の精度で測定することに成功しました(図2)。つまり、海水による荷重の分布と荷重の応答が正確にわかっていることから、地下の構造を推定できます。しかも、この応答は地震波では原理的に得ることができない、地下の弾性定数や密度の情報持っています。私はこの手法を用いて地下の構造を推定しました(図3)。

推定された結果、プレートの直下には50kg/m³程度の周りよりも低密度な層が存在することが明らかになりました。この低密度層が周りよりも300°C程度の高温であれば、物質の膨張の効果で

低密度層を説明する事が可能です。さらに、この高温層は地震波の解析から得られている速度構造だけでなく、減衰構造とも整合性のある結果でした。このことは、プレートの直下がほかの領域よりも熱くて柔らかくなっていることを定量的に示し、この領域が潤滑油のような役割をしていることを改めて確認しました。この手法は地震波では原理的に知ることができなかった、地域的な弾性定数や密度構造を明らかにします。今後、この手法を用いて、全世界的な解析が行われれば、新たな地球像の創造につながると期待されます。

参考文献

Ito, T. and Simons, M., science, DOI: 10.1126/science.1202584, (2011).

2003年 京都大学理学研究科地球惑星科学専攻博士課程修了、2003年 日本学術振興会特別研究員 (PD)、2004年-2007年 名古屋大学大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター・助手、2007年-現在 名古屋大学大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター・助教、2009年-2011年 日本学術振興会 海外特別研究員 (カリフォルニア工科大学)
モットー：人間は強くないが、弱くもない

いとう たけお



グローバル30—留学生を迎え本格始動—

渡辺 芳人 副総長（研究・国際企画関係担当）

名古屋大学は、平成21年7月に我が国の高等教育における国際競争力の強化等を目的とする文部科学省事業「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業（グローバル30）」の拠点の一つとして採択され、大学における国際化の推進に向けて様々な事業を行ってきました。

国際プログラム群第1期生の入学

これらの事業の中でも、本学が重点を置いて取り組んでいる事業の一つである、英語のみで学位を取得できる国際プログラム群が初めての学生を迎え、平成23年10月に開始しました。国際プログラム群では、これまでの日本語による質の高い学部・大学院教育を留学生にもより広く提供し、将来的には、国際プログラム群以外の学生も、英語の授業を受講できる環境を構築して、日本人と留学生が共に切磋琢磨し、国際的に活躍する人材を育成することを目指しています。

国際プログラム群は、世界各国から優秀な人材を獲得するために、新しい入学試験制度を取り入れました。筆記試験を行わずに、高校の成績等について高い基準を求めた出願要件を設定したうえで、書類審査及び面接を行い、渡日前に入学許可を行うというものです。平成23年10月には、第1期生として学部5プログラム（自動車工学、物理系、化学系、生物系、国際社会科学）に13カ国37名、大学院6プログラム（物理数理系、化学系、生物系、医学系、経済・ビジネス国際、比較言語文化）に8カ国19名の学生が入学しました。

国際プログラム群の学生は、授業内容、成績評価、卒業・修了要件など国際プログラム群以外の



国際プログラム群授業風景

カリキュラムと同等に設計された英語による授業を受講します。

グローバル30名古屋大学国際プログラム群学部奨学金の創設

また、国際プログラム群の学部プログラムに入学する学生に対して、名古屋大学基金及び海外の帰国留学生会と協定を結んだ奨学金制度を財源として、「G30名古屋大学国際プログラム群学部奨学金」を創設しました。この奨学金は、経済的困窮度に加えて、入学試験の成績を考慮し、更にグローバルな人材としての期待を込めて厳格な選考を通った優秀な学生を対象とするものです。平成23年度は10月7日に開催された授与式において、16名の新生入生に対して奨学金を授与しました。

留学生受入れ環境の整備

名古屋大学では、新規渡日留学生全員が速やかに居住環境を整え、勉学を開始できるよう大学設



名古屋大学秋季入学式



奨学金授与式



資料：英語による新設プログラム

置の国際交流会館等の宿舍を提供しています。留学生の増加に備えて、平成22年4月に106室、平成23年9月に93室の留学生宿舍を新設しました。この宿舍には、留学生が宿舍生活を送る上で発生する様々な質問や相談に応じ、アドバイスを行う生活支援アドバイザーを配置しています。

また、附属図書館において「留学生コーナー」に英語図書・雑誌等の充実を行い、学生の自主学習支援を行っています。

その他、国際プログラム群のカリキュラムとして、日本語科目を必須として制度設計を行い、また、専門分野を日本語で学ぶための日本語教材を開発するなど、日本語・日本文化に関する質の高い学習機会の提供に努めています。

留学生の卒業後の進路についても、就職指導を積極的に行うために、就職支援担当の専任職員を配置し、入学から就職までサポートする体制を構築しました。

平成23年は、名古屋大学を Nagoya University とするために、新たな一步を踏み出した記念すべき年となりました。G30の事業は、留学生に対する支援ばかりでなく、キャンパスの国際化・多様化を通じて、名古屋大学に所属する学生や教職員一人一人が国際社会を身近に感じられる環境作りを目指しています。日本人学生においても、名古屋大学の国際的資源を積極的に利用して、世界に視野を広げることが期待されています。

名古屋大学副総長（研究・国際企画関係担当）

名古屋大学物質科学国際研究センター教授

1982年 筑波大学大学院化学研究科より博士号（理学）取得

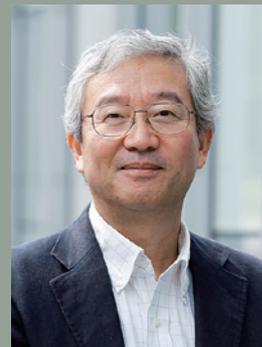
2001年 名古屋大学大学院理学研究科教授

2006年 同大物質科学国際研究センター教授

2009年 同大副総長

一言：大学の国際化は slow and steady with patience だと思います。

わたなべ よしひと



大学院工学研究科助教
UYANIK Muhammet (ウヤヌク ムハメット)

資源小国日本に豊富に存在するヨウ素を有効利用した環境調和型不斉合成

環境、エネルギー、資源に関する問題が深刻化するなか、所望の有機化合物や有機材料を効率的に生産するためには、環境調和型かつ高性能触媒の開発が必要不可欠です。また、医薬品等の光学活性化合物を選択的に効率よく合成するためには不斉触媒が必要です。従来の不斉触媒の多くは、野依良治博士のノーベル化学賞に代表されるように金属錯体であり、その金属イオンには、しばしば、パラジウムやルテニウムなどのレアメタルや、クロム、マンガン、オスミウムなどの毒性の強い元素が利用されてきました。しかし、近年、高価な希少元素や有害元素の使用を回避する環境調和型の触媒開発が強く求められています。このような背景の下、我々は、ヨウ素の遷移金属に似た酸化・還元機能に着目し、その有効利用の開拓を目的に、合理的に分子設計したヨウ素化合物を触媒に用いる高選択的酸化反応の開発研究を行っています。

ヨウ素はヨード卵、うがい薬や消毒薬にも使われる身近な化学物質であるばかりか、体内で甲状腺ホルモンを合成するのに必要なため、人間にとって必須元素でもあります。日本はチリに続き、ヨウ素生産量世界第2位であり、資源小国である日本にとっては貴重な輸出資源です。従って、低毒性で資源豊富な元素であるヨウ素の有効

利用は日本にとって国家政策（元素戦略）としても非常に重要だと考えています。我々は、遷移金属錯体の代わりにヨウ素化合物を不斉触媒に、重金属酸化物の代わりに過酸化水素水を酸化剤に用いる環境調和型不斉酸化反応を世界に先駆けて開発しました。即ち、図1に示すように、共酸化剤として過酸化水素水存在下、光学活性な第四級アンモニウムヨージド触媒を用いてケトフェノールの酸化的環化反応を行い、高収率かつ最高98% eeの選択性（99:1）で目的とするジヒドロベンゾフランを合成することに成功しました。光学活性2-アシルジヒドロベンゾフラン骨格は数多くの生理活性物質に含まれており、その有用性が非常に高いです。本研究成果の特長は：(1) 一切、金属を使用していない、(2) 副生成物は水のみ、(3) 室温、常圧下での穏和な反応条件で、(4) 触媒効率が高く、反応も速い等です。

この研究成果は有機分子触媒による実用性の高い環境低負荷型選択的酸化法として産業界からも世界的に注目を集めています。省エネルギー、元素戦略、グリーンケミストリーの観点から有機合成化学を究め、真に有用な合成技術を開発し、医薬・化学産業の発展にさらなる貢献ができれば幸甚です。

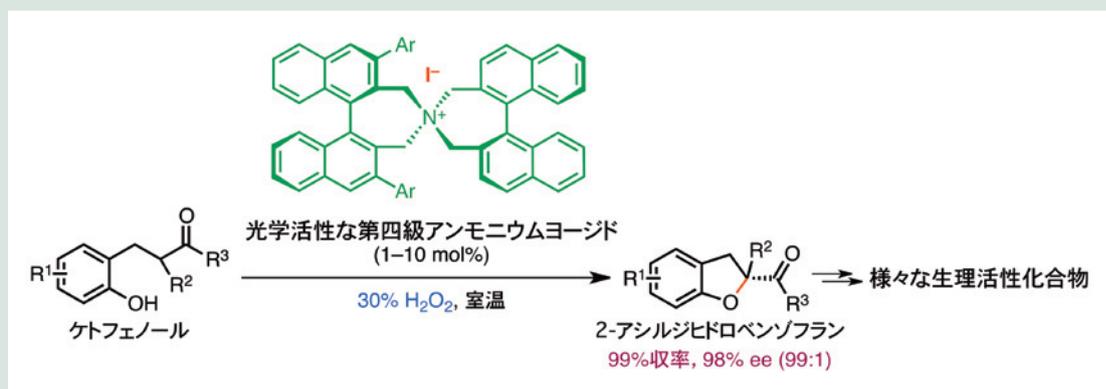


図1 環境調和型酸化的環化反応による2-アシルジヒドロベンゾフランの不斉合成

公開講演会「蛍光タンパク質の発見と生命科学研究への応用」を開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、10月2日(日)、理学南館大講堂において、公開講演会「蛍光タンパク質の発見と生命科学研究への応用」を開催しました。同講演会は、澤田 均理学研究科教授が代表を務める文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究「動植物に共通するアロ認証機構の解明(動植物アロ認証)」が主体となり行われたものです。



集合写真

最初に、2008年ノーベル化学賞を受賞した下村 脩本学特別教授が「緑色蛍光タンパク質発見の歴史」と題して特別講演を行いました。下村特別教授は、長崎医科大学附属薬学専門部(現長崎大学薬学部)を卒業し、助手時代に平田義正本学理学部教授(当時)の研究室に内地留学し、「海ホタルルシフェリンの構造」の研究で、学位を取得しています。その後、プリンストン大学に留学し、オワンクラゲのイクオリン(カルシウムに結合して青色に発光するタンパク質)と緑色蛍光タンパク質(GFP)を発見しました。下村特別教授は講演の中で、基礎研究の重要性を強調し、若い研究者への励ましの言葉を述べました。

続いて、東山哲也理学研究科教授が、植物の受精における花粉管誘導と重複受精の研究について、岡部 勝大阪大学微生物病研究所教授が、蛍光タンパク質の活用という視点からマウスの受精研究について、吉崎悟朗東京海洋大学海洋科学部准教授が、魚類の生殖幹細胞をGFPで可視化して異種の魚に移植することにより、大型魚類(マグロ)の卵を小型魚類に産ませ水産養殖に活かすという応用研究についてそれぞれ講演を行いました。

第12回ミュンスター大学・名古屋大学共同セミナーを開催

●大学院理学研究科、物質科学国際研究センター

大学院理学研究科及び物質科学国際研究センターは、10月3日(月)、4日(火)の2日間、野依記念物質科学研究館大講演室において、第12回ミュンスター大学・名古屋大学共同セミナーを開催しました。今回はミュンスター大学から教員7名と学生3名が来日して、研究発表を行いました。

今年には日本とドイツの交流150周年という記念の年にあたり、日独両国で様々なイベントが開催されており、今回

の日独共同セミナーにおいても特別企画として、「歌舞伎：入門－化粧・着付け・踊り－」と題したイベントが行われました。

当日は、アレクサンダー・オルブリッヒドイツ総領事も出席し、歌舞伎の着付けを体験したドイツ人学生や会場の人々とともに、普段は見ることのできない歌舞伎の舞台裏のぞいていました。



集合写真



着付けを体験したドイツ人学生

土木系教室50周年記念行事を開催

●大学院工学研究科、大学院環境学研究科、エコトピア科学研究所

大学院工学研究科、大学院環境学研究科及びエコトピア科学研究所は、10月1日(土)、豊田講堂において、土木系教室50周年記念式典とシンポジウム「For the Next 50 years」を開催しました。同シンポジウムは、現在大学院工学研究科、大学院環境学研究科、エコトピア科学研究所にまたがる土木系教室が、伊勢湾台風の復旧・復興のた



パネルディスカッションの様子

めに昭和36年に工学部土木工学科として創設されてから50周年を迎えることを記念して開催されたもので、片桐正博愛知県副知事、足立敏之国土交通省中部地方整備局長、中村英夫東京都市大学総長、松尾 稔元本学総長をはじめとして、学内外から約650名が参加しました。

シンポジウムでは、まず、徳山日出男国土交通省東北地方整備局長から「東日本大震災：初動期の活動について」と題して記念講演があり、地震発生直後から復旧・救援活動の指揮にあたった体験や、組織の意思統一、抗堪性と通信の確保、民間との連携などの教訓と反省が生々しく語られました。

続いて、「統合技術文化の形成と国際共有への土木工学の展開」をテーマにパネルディスカッションが行われ、林 良嗣環境学研究科教授をコーディネータに、山本卓朗土木学会会長、西村政洋アジア開発銀行交通専門家ら6名のパネリストが討議を行いました。ディスカッションでは、正確さと丁寧さを追求するスピリットとチームワークによって裏打ちされ、文化にまで高められた日本の統合技術は、世界に通用する普遍的価値であるとし、その統合技術文化を途上国へ移転するには、日本文化を理解する留学経験者からの協力が重要であるなどの意見が交わされました。

新生児集中治療室及び回復治療室の内覧会を開催

●医学部附属病院

医学部附属病院は、9月22日(木)、中央診療棟において、新生児集中治療室(Neonatal Intensive Care Unit: NICU)及び回復治療室(Growing Care Unit: GCU)の内覧会を開催しました。

NICU及びGCUは、早産などによる低体重児や先天性の重い病気を持つ新生児を受け入れて専門医療を行う施設

です。同院のNICUでは、市中病院のNICUでは通常行わない、一酸化窒素吸入療法、体外式膜型人工肺、持続的血液濾過透析、低体温療法などの高度医療を行うことができます。また、新生児外科症例や未熟児網膜症に対して治療ができる数少ない施設の一つであり、県外の施設からも入院依頼例が多数あります。しかし、これまでこれら多数の依頼の全てには対応できておらず、今回、移転、増床することとなりました。

9月28日(水)、中央診療棟4階にNICU及びGCUが移転し、今までのNICU 9床、GCU 11床からそれぞれ、12床、14床(来春には24床となる予定)に増床され、国立大学病院では最も大規模な施設の一つとなりました。

来春には、母体・胎児集中治療室(Maternal and Fetal Intensive Care Unit: MFICU)も整備され、総合周産期母子医療センターの認定を受ける予定となっています。大学病院の役割として医療従事者の育成や高度医療を行うことはもちろんですが、今後は地域周産期医療の最後の砦としての役割も担うことになります。

同内覧会には多くの関係者が参加し、施設に設置された機器、設備などに強い関心を寄せていました。



内覧会の様子

解剖弔慰祭を挙行

●医学部



弔慰祭の様子

医学部は、10月13日(木)、医学の教育・研究のために御献体された故人を慰霊するため、解剖弔慰祭を執り行いました。今年度も御遺族をはじめ、教職員、学生ら約300名が参列し、故人のご冥福をお祈りしました。

祭儀では、祖父江医学部長から「医学への御献体に対し心からの敬意と感謝の意を捧げるとともに、医学医療の進歩・発展及び医師・医学研究者の育成のために一層努力する覚悟であります」と慰霊のことばが述べられました。

また、学生を代表して医学部医学科2年生の鷲見 聰さんが「多くの方々のご協力のもと医学を学べることに感謝し、御献体してくださった皆様の御遺志を無駄にせぬよう今後とも勉学に励み、将来の医療の発展のために努めます」と御霊と御遺族に対して誓いました。祭儀に引き続き、解剖供養塔に御遺族、教職員、学生がお参りしました。

なお、今回供養された献体数は、系統解剖48体、病理解剖25体で、医学部創設以来の献体総数は17,282体となりました。

ICCAE 2011年度第5回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



講演するマチュンゴ研究・灌漑官

農学国際教育協力研究センター (ICCAE) は、9月21日(水)、2011年度第5回オープンセミナーを開催しました。

今回は、同センターの外国人客員研究員2名による講演が行われました。

はじめに、キャサリン・マチュンゴ ケニア国立灌漑公社アヘロ灌漑研究ステーション研究・灌漑官が、ケニアで大きな問題となっているイネいもち病の対処方策開発に関する研究成果を報告しました。マーカー選抜によるいもち病抵抗性品種の開発や放線菌による生物防除の可能性等について活発な討議が行われました。

次に、ハイン・ティータ カンボジア王立農業大学作物栽培学部副学部長が、同国の稲作に多大な被害を与えているトビイロウンカの発生状況の把握と防除技術を見出すために大学院生命農学研究科附属農場等で行った実験結果を報告しました。参加者から多数の助言がなされ、帰国後に有意義な実験が行われることが期待されます。

ICCAE 第12回オープンフォーラムを開催

●農学国際教育協力研究センター



集合写真

農学国際教育協力研究センター (ICCAE) は、10月6日(木)、7日(金)の2日間、野依記念学術交流館において第12回オープンフォーラムを開催しました。

今回は、「途上国留学生教育の人造り・国造りへの貢献～アフガニスタンの復興に向けて～」と題し、開発途上国からの留学生に対する教育をテーマとしました。

1日目は、2つの基調講演及び7つのケースレポートにより、途上国の高等教育と国際協力に係る現状と課題、アフガニスタン復興開発における人材育成の役割、アフガニスタン留学生への教育の事例、アフガニスタン農業・農村開発の現状と課題などが報告されました。

2日目は、日本の留学生教育の特色、大学にとっての途上国留学生教育の意義、留学生教育の効果を高めるための方策、アフガニスタン農業・農村開発に向けた留学生教育の役割と課題などについてパネルディスカッションを行い、活発な議論が展開されました。

ミクロの探検隊を開催

●博物館

博物館は、10月1日(土)、8日(土)の2回にわたり、ミクロの探検隊－電子顕微鏡を使ってみよう－「動物組織の不思議」及び「植物の不思議」を開催しました。

これは、9月13日(火)から11月19日(土)に同施設で開催されている企画展「ミクロの美術館」の関連イベントとして実施されたものです。



実体顕微鏡で熱心に観察をする参加者

「動物組織の不思議」の回では、参加者は初めに、タマネギの表皮や自分の口腔粘膜で作ったプレパラートを観察することで生物顕微鏡の扱い方を覚え、次にラットの腎臓やすい臓など各器官の組織標本を生物顕微鏡で観察しました。続いて各器官の構造を十分に頭に入れた後、電子顕微鏡を使って観察を行いました。

「植物の不思議」の回では、まず、観察園で植物採集をした後、吉野奈津子全学技術センター技術専門職員から植物の分類方法等の説明を受け、実体顕微鏡と電子顕微鏡で観察を行いました。

どちらの回の参加者も初めて操作する電子顕微鏡に最初は緊張気味でしたが、慣れてくると、自分の手でどんどん拡大されていくミクロの世界にすっかりひきこまれている様子でした。イベントの最後には、自分自身で撮影した電子顕微鏡写真のポストカードを作り、記念として持ち帰りました。

募集人数はそれぞれ20名ですが、応募者多数につき抽選となるほどの人気で、博物館では今後も企画を継続して地域貢献をしたい考えです。

名大を表敬訪問された方々 [平成23年7月16日～平成23年10月15日]

日付	国/地域	訪問者	目的
8月24日	台湾	国立中正大学より呉学長ほか6名	大学間協定の締結及び交流に関する意見交換
9月8日	中国	中国衛生部より王国際合作司副司長ほか3名	表敬あいさつ及び日中笹川医学奨学金制度に関する意見交換
9月20日	カナダ	在日カナダ大使館よりジョナサン T. フリード大使ほか2名、在名古屋カナダ領事館よりマット・フレイザー領事兼通商代表	表敬あいさつ及びカナダと日本間の学術交流推進に関する意見交換
10月3日	モンゴル	新モンゴル高等学校よりジャンチブ・ガルバドラツハ校長	表敬あいさつ及びG30プログラムに関する意見交換
10月4日	ドイツ	大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館よりアレクサンダー・オルブリッヒ総領事、ミュンスター大学よりゲルハウト・エルカー薬学部教授ほか1名	表敬あいさつ及びドイツとの学術交流推進に関する意見交換
10月13日	中国	中国政法大学より時副学長ほか1名	表敬あいさつ及び法学に関する意見交換

新たに締結した学術交流協定 [平成23年7月16日～平成23年10月15日]

大学間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名
8月24日	台湾	国立中正大学

部局間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名	部局名
6月20日	ポーランド	ポーランド科学院地質学研究院クラクフ研究所	大学院環境学研究科
7月7日	カナダ	オタワ大学国際開発グローバル・スタディーズ研究科	大学院国際開発研究科
7月21日	ドイツ	デュイスブルグ・エッセン大学東アジア研究所	大学院教育発達科学研究科及び教育学部
8月2日	オーストラリア	オーストラリア連邦科学産業研究機構生態系科学部門	大学院環境学研究科及び大学院工学研究科

構成員を対象とした研修 [平成23年7月16日～平成23年10月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
4月13日～ 7月22日(前期) 10月1日～ 1月27日(後期)	平成23年度語学研修(上級)	本学の国際交流・留学生担当事務系職員及び今後外国語(英語)能力を必要とする事務系職員に対して、外国語(英語)応用能力の増進を図り、もって国際交流事業に適応した職員を養成することを目的とする。	1名
6月16日～ 9月16日	平成23年度英会話実践研修(上級)	国際プログラム群実施対応を主な業務とする職員に対して、留学生及び外国人教員とスムーズにコミュニケーションが図れるよう、より実践的な英会話力を養成し、もって国際化対応の中核的人材を育成することを目的とする。	8名
7月1日～ 12月28日	平成23年度英会話基礎研修(中級・初級)	「事務部門の国際化アクション・プラン2010」を踏まえ、本学の国際交流・留学生担当職員及び業務上、英語能力を必要とする職員に対して、英語応用能力の増進を図り、もって国際化に対応した職員を養成するとともに、英語によるコミュニケーション能力を備えた職員を養成する事を目的とする。	32名
7月21日～22日	平成23年度課長補佐研修	本学課長補佐級職員に対し、課長(事務長)補佐又は専門員として、業務遂行・組織運営に必要な管理能力についての基本的な考え方を習得するとともに、マネジメント能力、ロジカル・コミュニケーションの重要性について理解を深めることを目的とする。	16名
8月25日～26日	平成23年度東海地区国立大学法人等係長研修	東海地区の国立大学法人、大学共同利用機関法人、独立行政法人国立高等専門学校機構及び独立行政法人国立青少年教育振興機構の機関において、係長(専門職員)に昇任した職員に対して、職場リーダーとして必要なスキルを習得するとともに、実践を通してOJTの重要性について理解し、係長(専門職員)として役割を担うために必要な業務効率化その他の知識を習得することを目的とする。	63名
8月31日	TOEIC公開テスト準備セミナー	外部講師によるレッスン形式でのセミナーにより、TOEIC公開テストの効果的な勉強法を理解することを目的とする。	14名
8月31日～ 9月2日	平成23年度技術職員研修(環境安全コース、生物・生体コース)	本学技術職員に対し、その職務に必要な専門的知識及び技術を修得させ、技術職員の資質の向上と応用能力の開発及び養成を図ることを目的とする。	12名
9月1日～30日 (集中受講期間)	平成23年度公的資金の使用に係るe-Learning研修	本学構成員の公的資金の使用に関する理解を高め、研究費等の適切な使用を徹底することを目的とする。	約6000人 (原則全構成員)
9月16日	平成24年度科学研究費補助金公募説明会	本学教員に対し、科学研究費補助金の採択向上のため、科研費必勝マニュアル、研究計画調書作成のノウハウについての説明を通じて、特に大型科学研究費補助金を獲得することを目的とする。	186名
9月22日	平成23年度事務系職員企画力向上研修	事務処理上の問題点や改善点について、業務改善企画からパワーポイント等を用いた提案に至るまでの方法について学び、事務系職員の企画力向上に必要な能力の養成を図り、もって事務系職員の資質向上に繋げることを目的とする。	21名
10月11日	平成23年度新規採用職員フォローアップ研修	平成23年度新規採用職員研修を修了した職員に対し、採用後6か月間を省みるとともに、改めて法人職員として必要な能力の開発及び養成を図ることを目的とする。	27名
10月14日	第5回特許中級セミナー	特許出願経験がある本学教職員・研究者等に向けて、特許制度、拒絶理由通知に対する反論の着眼点を理解する。	5名

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
1 石原一彰工学研究科教授らのグループ ポリマー樹脂などの原料を低コストで安全に合成する技術を開発	9.16 (金)	日刊工業
2 山岡耕春環境学研究科教授は愛知県の三連動地震の被害予測調査をする検討委員会の会長となる	9.16 (金)	中日 (朝刊)
3 本学が2008年に東海地区の国立大学として始めて地下水を飲料水として利用するシステムを導入したことが紹介される	9.16 (金)	中日 (朝刊)
4 朝日カルチャーセンター新講座:「ルネッサンスの象徴を読み解く 画像学入門」鈴木繁夫国際言語文化研究科教授	9.16 (金)	朝日 (夕刊)
5 山岡耕春環境学研究科教授が会長を務める三連動地震への検討委員会の初会合が開かれる	9.17 (土)	読売
6 「がん研究の現在・過去・未来ー若者へのメッセージー」開催:10月2日 貝淵弘三医学系研究科教授が講演	9.17 (土)	中日 (朝刊)
7 本学は京都銀行と産学連携協定を締結する	9.17 (土) 9.21 (水) 9.22 (木)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊) 他2社 毎日 (朝刊)
8 坪木和久地球水循環研究センター准教授は台風12号の被害について「もっと台湾の災害に学ぶべきだった」と反省する	9.18 (日)	日経 (朝刊)
9 山澤弘実工学研究科教授は日進市の花火大会で福島産花火の使用が中止されたことについて「行き過ぎた反応だ」と話す	9.19 (月)	中日 (朝刊)
10 大内乗有医学系研究科寄附講座教授と室原豊明医学系研究科教授のグループ 肥満や糖尿病への改善作用をもつ新たなたんぱく質を発見	9.19 (月)	日刊工業
11 現代日本誤百科 (496):「悪天候が回復次第」救助を開始 町田 健文学研究科教授	9.19 (月)	中日 (朝刊)
12 博物館「ミクロの探検隊」参加者募集:10月1日、10月8日、11月12日開催	9.19 (月)	中日 (朝刊)
13 本学などが「中部 ESD 拠点」として活動している成果が2014年に愛知県で開催予定の「国連環境教育会議」において発表されることになる	9.19 (月)	中日 (朝刊)
14 現代日本誤百科 (497):「大連立がすぐに実現するのは困難」町田 健文学研究科教授	9.20 (火)	中日 (朝刊)
15 ひと・仕事:著書「リアリティと他者性の人類学 現代フィリピン地方都市における呪術のフィールドから」を刊行した東 賢太朗文学研究科准教授のプロフィールが紹介される	9.20 (火)	中日 (朝刊)
16 東海学生アメリカンフットボール:本学は34-3で日本福祉大学に勝利する	9.20 (火)	朝日 (朝刊)
17 現代日本誤百科 (498):五輪に「出場したいという目標」町田 健文学研究科教授	9.21 (水)	中日 (朝刊)
18 現代日本誤百科 (499):「間が持たない」町田 健文学研究科教授	9.22 (木)	中日 (朝刊)
19 福和伸夫環境学研究科教授は大震災の啓発アニメーションの監修を担当する	9.22 (木)	中日 (朝刊)
20 本学ほか東海地方の5つの国立大学と国立長寿医療センターは介護支援技術の研究発表会を開く:28日	9.22 (木)	中日 (朝刊)
21 博物館野外観察園ミニ展示「生き物のかたちとおもしろさ」開催:20日～10月15日	9.23 (金)	中日 (朝刊)
22 朝日カルチャーセンター新講座:「やってみよう!哲学の論争」「ドイツ語 (対訳) で読むハイデガー『芸術作品の根源』」宮原 勇文学研究科教授、「最新宇宙講座」杉山 直理学研究科教授、犬塚修一郎同教授、國枝秀世同教授、草野完也太陽地球環境研究所教授、竹内 努理学研究科准教授	9.23 (金)	朝日 (朝刊)
23 中村光廣現象解析研究センター准教授らが参加する国際研究グループがニュートリノが光より速く動いたとの測定結果を発表	9.24 (日)	中日 (朝刊) 他4社
24 本学混声合唱団名古屋大学コール・グランツェは中部合唱コンクール大学部門で金賞を受賞する	9.25 (日)	朝日 (朝刊)
25 現代日本誤百科 (500):「退陣時期を言わないのは不条理」町田 健文学研究科教授	9.26 (月)	中日 (朝刊)
26 福和伸夫環境学研究科教授はマスメディアが防災・減災報道をする際に重要な点について語る	9.26 (月)	中日 (朝刊)
27 市民公開講座「C型肝炎は治せる時代へ!」開催:10月29日 片野義明医学部附属病院講師が講演	9.26 (月)	中日 (朝刊)
28 小松雅宏教養教育院准教授らが光より速く移動するニュートリノ観測についての報告会を開く	9.26 (月) 9.27 (火)	中日 (夕刊) 毎日 (夕刊) 日刊工業 他3社
29 ペーパーナイフ:野依良治本学特別教授はノーベル賞を受賞するような研究者の素質、能力の特徴について語る	9.27 (火)	中日 (朝刊)
30 医学部保健学科市民公開講座開催:10月15日 深谷陽子医学部附属病院副看護部長が講演	9.27 (火)	中日 (朝刊)
31 鶴舞キャンパスで本学をはじめとする東海地方の国立8大学が事務連携協定に調印する	9.28 (水)	中日 (朝刊) 他4社
32 高木 新理学研究科准教授ら 細胞が形を変化させる仕組みを解明	9.28 (水)	中日 (朝刊)
33 現代日本誤百科 (501):「安心を実感」する 町田 健文学研究科教授	9.28 (水)	中日 (朝刊)
34 顔:「超光速」ニュートリノ観測を発表した小松雅宏教養教育院准教授のプロフィールが紹介される	9.28 (水)	読売
35 名古屋大学オープンカレッジ開催:9月17日～平成24年3月17日の間の10日間	9.28 (水)	中日 (朝刊)
36 教育学部附属中学・高等学校の授業「共生と平和の科学」が評価され昨年ユネスコスクールに認定されたことが紹介される	9.28 (水)	朝日 (朝刊)
37 博物館特別講演会「慢性ストレスが引き起こす細胞の過労死」開催:10月4日 木山博資医学系研究科教授が講演	9.28 (水) 9.30 (金)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
38 本学は日本ガイシ株式会社相談役・本学経営協議会委員 柴田昌治氏に名誉博士号を授与する	9.29 (木)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
39 現代日本誤百科 (502):「けげんなこと」だと思ふ 町田 健文学研究科教授	9.29 (木)	中日 (朝刊)
40 博物館体験ワークショップ「石器からみるヒトの進化」開催:10月22日	9.29 (木)	中日 (朝刊)
41 本学で3日に開催された「防災・減災シンポジウム」の内容が紹介される	9.29 (木)	朝日 (朝刊)
42 丹羽公雄本学名誉教授は「超光速」ニュートリノ観測の成果発表の共同筆者になることを拒否する	9.29 (木)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
43 小田裕昭生命農学研究科准教授ら 日本人由来肝細胞の肝機能を肝臓レベルまで高めることに世界で初めて成功	9.29 (木) 9.30 (金)	朝日 (夕刊) 読売 日刊工業
44 本学は10月1日に大幸キャンパスに「脳とこころの研究推進センター」を開設する	9.30 (金)	中日 (朝刊)
45 博物館秋の野外観察園児学会開催：10月15日	9.30 (金)	読売
46 愛知県は航空宇宙産業に関わる本学など10地区を国際戦略総合特区に申請する	9.30 (金)	日経 (朝刊) 他3社
47 戸田山和久情報科学研究科教授は「超光速」ニュートリノ観測成果発表について「科学に多くの人の目が向いてくれたのはいいこと。今後の検証も興味を持って見てもらえば、科学とはどういうものなのか知ってもらうきっかけになるのでは」と話す	9.30 (金)	中日 (朝刊)
48 第22回濾過技術特別セミナー「濾過技術の動向と最近の応用事例」開催：10月25日 向井康人工学研究科准教授が講演	9.30 (金)	日刊工業
49 29日に開幕した「マスコミ倫理懇談会」で隈本邦彦減災連携研究センター客員教授が講演する	9.30 (金)	中日 (朝刊) 読売
50 NAGOYAからのニッポン復活 応援シンポジウム第3回「東日本大震災を教訓にした建造物の耐震性を考える」での護 雅史環境学研究科准教授の講演内容が紹介される	9.30 (金)	読売
51 小島勢二医学系研究科教授は最先端のがん治療について語る	9.30 (金)	朝日 (朝刊)
52 鶴舞キャンパス敷地内に建設されることとなった「ドナルド・マクドナルド・ハウス」への本学学生たちのサポート活動が紹介される	9.30 (金)	朝日 (朝刊)
53 岡山朋子エコトピア科学研究所特任講師は「おかえりやさいプロジェクト」のリーダーを務め、「名古屋市がごみの循環先進市になれば」と話す	9.30 (金)	朝日 (朝刊)
54 白石美咲さん本学学生は「就職先を企業の規模ではなく、『働いている人がすごい』『商品が社会の役に立っている』を基準に選んだ」と話す	9.30 (金)	中日 (朝刊)
55 篠原久典理学研究科教授、宮田耕充物質科学国際研究センター助教らはナノチューブを材料に通常の薄膜トランジスタより電子が1ケタ以上速く動く素子を試作する	9.30 (金)	日経産業新聞
56 「あいちサイエンスフェスティバル」開催：10月1日～11月6日	9.30 (金) 10. 2 (日)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
57 過去のノーベル賞受賞者として野依良治本学特別教授、小林 誠同特別教授、益川敏英同特別教授、下村 脩同特別教授の名が挙げられる	10. 1 (土)	読売
58 古川路明本学名誉教授は飯館村などでプルトニウムが検出されたことについて、「このレベルでは健康への影響は少ない」と話す	10. 1 (土)	読売
59 30日に閉会した「マスコミ倫理懇談会」での隈本邦彦減災連携研究センター客員教授の言葉が紹介される	10. 1 (土) 10. 3 (月)	読売 中日 (朝刊)
60 佐藤 豊生命農学研究科准教授ら イネの枝を作る遺伝子を発見	10. 1 (土) 10. 3 (月) 10. 5 (水)	毎日 (朝刊) 中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 日刊工業
61 編集室から：野依良治本学特別教授がノーベル賞を受賞した当時を振り返る	10. 2 (日)	読売
62 山澤弘実工学研究科教授は日進市で福島製花火の使用が中止された問題について「差別やいじめの構図に似ている」と指摘する	10. 2 (日)	中日 (朝刊)
63 医学部附属病院は東海地方で認知症の治療実績のある病院のひとつとして挙げられる	10. 2 (日)	読売
64 エレメント：野依良治本学特別教授は化学者・学生に奮起を促す	10. 3 (月)	日刊工業
65 新井史人工学研究科教授は毛細血管の三次元構造を再現する	10. 3 (月)	日刊工業
66 現代日本訳百科 (503)：「時間のロスだという論評」町田 健文学研究科教授	10. 3 (月)	中日 (朝刊)
67 中西 疆本学名誉教授、竹田美和工学研究科教授が山崎貞一賞を受賞	10. 3 (月)	日刊工業
68 語録：「『超光速』ニュートリノ観測成果発表には 非常に大きな勇気が必要だった」小松雅宏教養教育院准教授	10. 3 (月)	中日 (朝刊)
69 河村雅隆国際言語文化研究科教授は東京都の暴力団排除条例で民間放送が対応を迫られていることについて「判断に苦しむ場面が出てくるのではないかと指摘する	10. 3 (月)	朝日 (朝刊)
70 現代日本訳百科 (504)：「真摯な努力」町田 健文学研究科教授	10. 4 (火)	中日 (朝刊)
71 川崎浩司工学研究科准教授からの津波予測データを受け、三重県が浸水区域を見直す	10. 4 (火)	朝日 (朝刊)
72 杉浦伸一医学系研究科寄附講座准教授はうつ病の早期発見・治療推進をめざす「あいち GP ネット」のシステムを考案する	10. 4 (火)	中日 (朝刊)
73 本学で濱口総長、中川正春文部科学大臣、若手研究者たちと下村 脩本学特別教授が懇談する	10. 4 (火)	中日 (朝刊)
74 市民大学公開講演会開催：11月2日 川崎浩司工学研究科准教授が講演	10. 4 (火)	中日 (朝刊)
75 本学で高等学校生が放射性物質を題材とした実験成果を披露する	10. 4 (火)	毎日 (朝刊)
76 福和伸夫環境学研究科教授は政府中央防災会議の最終報告を受けてインタビューに答える	10. 4 (火)	日経 (夕刊)
77 金子一史発達心理精神科学教育研究センター准教授は子どもの指しゃぶりについて解説する	10. 4 (火)	中日 (夕刊)
78 現代日本訳百科 (505)：「首相の存在自体が政治空白だ」町田 健文学研究科教授	10. 5 (水)	中日 (朝刊)
79 辻本哲郎工学研究科教授は「東海・東南海・南海地震対策中部圏戦略会議」第1回会議で「東日本大震災の経験を踏まえて工夫を凝らし、連鎖を止めていかねばならない」と話す	10. 5 (水)	朝日 (朝刊)
80 愛知県精神科病院協会第6回こころフェア開催：9月10日 杉浦伸一医学系研究科寄附講座准教授が講演	10. 5 (水)	日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
81 本学で英語のみの国際コースに入学する留学生たちの秋季入学式が開かれる	10. 5 (水)	中日 (夕刊)
82 益川敏英本学特別教授 ラジオ公開講座で原子力発電所存続容認を表明	10. 6 (木)	中日 (朝刊)
83 本学で講演を行ったダニエル・シェヒトマン博士がノーベル化学賞を受賞	10. 6 (木)	読売
84 竹内恒博エコトピア科学研究所准教授は国際会議を通じて面識のあるダニエル・シェヒトマン博士について「話の上手な方」と語り、齋藤 晃同准教授も「博士のノーベル賞受賞は私もうれしい」と話す	10. 6 (木)	中日 (朝刊)
85 杉山 直理学研究科教授は今年のノーベル物理学賞について「私たちはいま最大の謎に直面していると言っていい。今回はその謎に迫る研究の原点となる発見に与えられた」と話す	10. 6 (木)	中日 (朝刊)
86 現代日本誤百科 (506) : 「寒っ」町田 健文学研究科教授	10. 6 (木)	中日 (朝刊)
87 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授は過疎地教育の現状と課題について語る	10. 6 (木)	中日 (朝刊) 岐阜西濃版
88 名古屋大学星の会講演会開催：8日 福井康雄理学研究科教授などが講演	10. 6 (木)	朝日 (朝刊)
89 日本血液学会公開シンポジウム～いのち・愛・かがやき～開催：16日 小島勢二医学系研究科教授が講演	10. 6 (木)	中日 (朝刊)
90 雨水利用フォーラム開催：10日 竹内恒夫環境学研究科教授が講演	10. 6 (木)	中日 (朝刊)
91 延山龍介さん、後藤 匠さん本学学生は第14回全日本学生グライダー新人競技会に出場する	10. 6 (木)	朝日 (朝刊)
92 佐藤寿一医学系研究科講師は東洋医学についてわかりやすく解説する	10. 7 (金)	中日 (朝刊)
93 附属図書館秋季特別展「そろばんと和算書日本の計算文化にふれる」開催：14日～11月4日	10. 7 (金)	中日 (朝刊)
94 第3回地球教室－親子対象フィールドセミナー－「河原の石で包丁をつくろう！」開催：29、30日	10. 7 (金)	読売
95 博物館野外観察園見学会開催：15日	10. 7 (金)	中日 (朝刊)
96 第16回 spcafé「自然は対称性を好む？－part 2－」開催：12日	10. 7 (金)	中日 (朝刊)
97 金武直幸工学研究科教授、石黒太浩助教は天田財団の今年度前期の助成対象に選ばれる	10. 7 (金)	日刊工業
98 朝日カルチャーセンター新講座：「西洋中世美術史－中世の写本挿絵史概説」木俣元一文学研究科教授	10. 7 (金)	朝日 (朝刊)
99 環境医学研究所市民公開講座2011「癌の新たな治療戦略」開催：15日	10. 7 (金)	中日 (朝刊)
	10.13 (木)	朝日 (朝刊)
	10.14 (金)	毎日 (朝刊)
100 千種学区女性会学習会「放射能について考える」開催：9月15日 黒田光太郎本学名誉教授が講演	10. 8 (土)	中日 (朝刊) 千種ホームニュース
101 小川 光経済学研究科教授は名古屋市の減税政策について「行革手段として有効」と語る	10. 8 (土)	中日 (朝刊)
102 「あいちサイエンスフェスティバル」市民向け講演会「先端科学技術と社会－高齢社会に向けた医療の転換－」開催：8日 大島伸一元医学部附属病院院長が講演	10. 9 (日)	中日 (朝刊)
103 坪木和久地球水循環研究センター准教授は地球温暖化の影響で世界的に進む台風の強化について語る	10. 9 (日)	朝日 (朝刊)
104 ニュースがわからん！ワイド「タイムマシンができちゃうの？」：本学などが「超光速」ニュートリノを観測したが、実際にタイムマシンをつくるのは簡単でないことが解説される	10. 9 (日)	朝日 (朝刊)
105 佐藤友利亜さん本学学生の東北地方太平洋沖地震震災支援の活動が紹介される	10. 9 (日)	読売
106 本学と京都大学の研究グループ セリウム化合物を薄い膜状にすることで磁場に強い超電導状態になることを発見	10.10 (月)	中日 (朝刊)
107 現代日本誤百科 (507) : 「敵をこの世から葬る」町田 健文学研究科教授	10.10 (月)	中日 (朝刊)
108 福和伸夫環境学研究科教授の監修で防災意識を学ぶ絵本が発刊される	10.10 (月)	読売
109 松下副総長のポリスチレンなど3種類の高分子化合物を適切に配列すると準結晶になることを2007年に発見した業績が紹介される	10.10 (月)	日刊工業
110 光井能麻環境学研究科研究員は宮城県の沖合いで数百年にわたりひずみを蓄え続けるプレートの動きがあるとする理論をとりまとめる	10.10 (月)	日経 (朝刊)
111 核心：今年のノーベル賞の振り返りで2008年の小林 誠本学特別教授と益川敏英同特別教授の受賞、来年度の赤崎 勇本学特別教授の受賞への期待が述べられる	10.12 (水)	中日 (朝刊)
112 現代日本誤百科 (508) : 次は「相手に雪辱する」町田 健文学研究科教授	10.12 (水)	中日 (朝刊)
113 8日に開催された「Viva 地球フォーラム2011」での杉山範子環境学研究科博士研究員の発言が紹介される	10.12 (水)	中日 (朝刊)
114 八木伸也工学研究科准教授らの研究チーム おならのガスの成分から大腸がんの有無を調べる手法を開発	10.12 (水)	朝日 (夕刊)
115 博物館「触れて感じて学ぶ！サイエンス－考古学と赤外線がひらく世界－」開催：15日	10.12 (水)	中日 (夕刊)
116 山本裕二総合保健体育科学センター教授らのグループ サッカーで3人でボールを回した場合、上級者は自分以外の二人の動きを考えて動くことを発見	10.13 (木)	中日 (朝刊)
117 現代日本誤百科 (509) : 食券は「店員までお申し付けください」町田 健文学研究科教授	10.13 (木)	中日 (朝刊)
118 工学研究科で「あいちサイエンスフェスティバル」の一環として「クロスカップリング反応」の子ども実験教室が開かれる	10.13 (木)	中日 (朝刊)
119 市民公開講座「関節リウマチの新しい薬物治療」での石黒直樹医学系研究科教授による質疑応答が紹介される	10.13 (木)	中日 (朝刊)
120 第17回 spcafé「カオス－法則が生む乱れと多様さ」開催：20日	10.13 (木)	中日 (朝刊)
121 南極教室開催：30日 水野 亮太陽地球環境研究所教授が講演	10.13 (木)	中日 (朝刊)
122 法学研究科で読売新聞講座が12日に始まる	10.13 (木)	読売
123 本学学生などが参加する「NAGOYA 学生タウン構想推進委員会」が「名古屋まつり」で金シャチをモチーフにしたモザイクアートでギネス記録を目指す	10.13 (木)	中日 (朝刊)
124 鈴木律朗医学系研究科寄附講座准教授らの研究グループ NK細胞リンパ腫に対して効果の大きい治療法を開発	10.14 (金)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)

記事	月日	新聞等名
125 家森信善経済学研究科教授は東三河地方の金融について「M & A 支援などの金融サービスを強化するには、単独では限界がある」と指摘する	10.14 (金)	日経 (朝刊)
126 隈本邦彦防災連携研究センター客員教授は9月29、30日に開催された「マスコミ倫理想談会『震災・原発 検証メディアの責務』」で「被災者に寄り添った報道は必要だが、それだけでは震災の本当の教訓が忘れられる」と話す	10.14 (金)	朝日 (朝刊)
127 本学や大阪大学、北陸先端科学技術大学院大学で学生や助手の経験を持つベトナム国家大学学長 グエン・ゴク・ビン氏に豊橋技術科学大学が名誉博士号を授与する	10.14 (金)	日刊工業
128 「あいち医師・歯科医師九条の会」第12回憲法のつどい開催：22日 森 英樹本学名誉教授が講演	10.15 (土)	中日 (朝刊)
129 鷺谷 威環境学研究科教授は15日開幕した日本地震学会で「想定外の震災に負い目を感じる。地震学や学者の姿勢に問題がなかったか問い直す」と話す	10.15 (土)	日経 (夕刊)

博物館からのお知らせ

名古屋大学創基140周年記念展示

「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』-解剖学創始者のミュージアム」

博物館では、12月6日(火)から2月29日(水)まで、名古屋大学創基140周年記念展示「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』-解剖学創始者のミュージアム」を開催します。

今年は創基140周年、つまり本学の母体となる仮医学校・仮病院が創設された明治4年から140年目を迎えます。その10年後、愛知医学校に教諭として招かれたのが奈良坂源一郎です。

奈良坂は、日本における解剖学や組織学草創期の教育に献身した一方で、本草学の流れをくむ博物家としての知識を社会に普及させることにも努めた「名古屋文化史上不滅の人」と言われています。同展示では、医学者及び博物学者として多彩な業績を残した奈良坂源一郎の博物画を中心に紹介し、本学の黎明期を支えた学問的まなごしの深さと幅広さを感じていただきたいと思います。



奈良坂源一郎「蟲魚圖譜」に描かれたアヤマカサゴ



開催期間：12月6日(火)～2月29日(水) (日・月曜日は休館)
 開館時間：10時～16時まで (入場は15時30分まで)
 入場料：無料
 問い合わせ先：博物館事務室 Tel 052-789-5767

展示内容

- 1) 名古屋大学の源流と奈良坂
 主な展示物：
 明治初年愛知県公立病院外科手術の図、奈良坂が使用した組織標本プレパラート、奈良坂による人体解剖スケッチ、愛知病院による濃尾地震救援活動図など
- 2) ナチュラリスト奈良坂の博物学と社会教育
 主な展示物：
 奈良坂源一郎「蟲魚圖譜」の博物画、吉田翁虫譜、嘗百社の植物標本、愛知教育博物館関連資料など

関連企画

【特別講演会】

「創基140周年を迎えて一名古屋大学の源流をたどる」
 日 時：12月7日(水) 14:00～
 講 師：濱口道成 (本学総長)
 参加費：無料

【ギャラリートーク】

日 時：12月24日(土) 13:30～
 講 師：島岡 眞 (博物館研究協力者)
 参加費：無料

【初めて描く博物画-ボタニカルアート体験】

日 時：12月14日(水)、21日(水) 13:00～16:00
 参加費：1,000円
 ※初心者、2日間とも参加できる方対象。
 募集要項はホームページをご覧ください。

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月13日(火)～11月19日(土)

場 所：博物館 3階展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

企画展「ミクロの美術館—顕微鏡で見た人体の世界—」

[関連講演会] 11月19日(土)
場 所：博物館 3階講義室
時 間：13:30～15:00
講演題目：「電子顕微鏡で観る楽しみ」
講 演 者：蛭薙観順 (博物館准教授)
対 象：一般
参 加 費：無料



[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

11月19日(土)

[記念講演会]

場 所：豊田講堂
時 間：13:00～16:00
対 象：一般
参 加 費：無料

環境学研究科

創設10周年記念講演会、記念式典

講演題目：「環境学研究科の10年」
講 演 者：溝口常俊 (環境学研究科長)
講演題目：「未来社会を選択—大震災後のエネルギーと環境—」
講 演 者：浅岡美恵氏 (特定非営利活動法人気候ネットワーク代表)
講演題目：「季語の地球科学—変動帯に生きる—」
講 演 者：尾池和夫氏 (財団法人国際高等研究所長)

[記念式典]

場 所：シンポジオンホール
時 間：16:30～17:00 (予定)
対 象：本学関係者および
環境学研究科修了者

[問い合わせ先]

環境学研究科
准教授 岩松将一 052-789-4849

11月23日(水)

場 所：博物館展示室
時 間：13:00開演
参 加 費：無料

博物館コンサート

「古楽研究会第31回定期演奏会」

演奏曲目：「フルートと通奏低音のためのソナタニ長調」ゲオルグ・フィリップ・テレマン、
「5つのフルートのための協奏曲」ジョゼフ・ボダン・ド・ボワモルティエ、
「レイトン婦人のアルメイン」ジョン・ダウランド、
「合奏協奏曲集《調和の靈感》作品3 協奏曲第8番イ短調」アントニオ・ヴィヴァルディ

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

11月24日(木)

場 所：日本経済新聞社名古屋支社会議室
時 間：18:00～19:30

第13回名古屋ビジネスセミナー

講演題目：「地域とともに—地域金融機関の役割—」
講 演 者：種橋潤治氏 (株式会社三重銀行取締役頭取)

[問い合わせ先]

経済学研究科
附属国際経済政策研究センター
052-789-4945

11月26日(土)

場 所：ES 総合館 1階 ES ホールおよび
ES 会議室
時 間：13:00～16:15
対 象：中学生、高校生および
保護者、教員
参 加 費：無料

若手女性研究者サイエンスフォーラム
女子中高生理系進学推進セミナー

内 容：講演、ポスターガイダンス、
ポスターセッション等
講演題目：「楽しく仕事をしなきゃ、もったいない」
講 演 者：土井美和子氏 (株式会社東芝
研究開発センター首席技監)
講演題目：「音を感じる脳の理解に向けて
—研究とライフイベントとの両立—」
講 演 者：上川内あづさ (理学研究科教授)



[問い合わせ先]

総務部職員課
男女共同参画担当 052-789-5976

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月28日(月)～30日(水)

場 所：野依記念学術交流館

時 間：13:00～16:15

対 象：一般

参 加 費：無料

懇親会費：一般・教員：3,000円、

ポスドク：2,000円、

学生：1,500円

(11/29 18:30～)

グローバル COE プログラム

「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」

国際シンポジウム

平田義正先生追悼記念講演

[問い合わせ先]

GCOE 化学事務室

COE 特任准教授 加藤清則 052-789-2954

11月28日(月)

場 所：岡崎市図書館交流プラザ Libra

時 間：14:00～16:00

[問い合わせ先]

環境学研究科

しんきん環境事業

イノベーション寄附講座 052-747-6550

環境学研究科 しんきん環境事業

イノベーション寄附講座 第2シリーズ第6回講演会

講演題目：「持続可能な人工林管理－森林利用と環境保全のバランスを考える－」

講 演 者：山田容三（生命農学研究科准教授）

講演題目：「幼児期における環境学習」

講 演 者：篠田陽作氏（特定非営利活動法人ネイチャークラブ東海代表）

12月3日(土)、12月17日(土)、

1月14日(土)

場 所：インキュベーション施設1階

プレゼンテーションルーム

時 間：10:00～

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

ビジネス人材育成センター

平成23年度後期 B 人セミナー

テ ー マ：「食品業界および企業での研究開発について、

「弁理士の業界と業務」(12/3)

「グローバルスタンダードな伝達技術とは、

「論理的でわかりやすい伝達技術（アウトライン化）」、

「アウトライン化：事例演習と実践練習」、

「社会人に求められるビジネスマナー」(12/17)

「医薬品・医療機器産業の近未来」、

「プレゼンテーションスキル研修」(1/14)

12月6日(火)～2月29日(水)

場 所：博物館展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

名古屋大学創基140周年記念展示

「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』－解剖学創始者のミュージアム－」

[同時開催]

「現代の博物画－ボタニカルアート作品展」

[特別講演会]

12月7日(水)

場 所：博物館講義室

時 間：14:00～15:30

演 題：「創基140周年を迎えて－名古屋大学の源流をたどる－」

講 演 者：濱口道成（本学総長）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月8日(木)、9日(金)

場 所：ミッドランドスクエア5階

ミッドランドホール

時 間：13:00～17:45 (12/8)、

10:00～15:15 (12/9)

グローバル COE プログラム

「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」

第3回国際シンポジウム

テ ー マ：「革新的治療法開発をめざしたガン研究の新たな展開」

[問い合わせ先]

GCOE 事務局

coemed@med.nagoya-u.ac.jp

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月9日(金)～12月11日(日)

場 所：野依記念学術交流館 (12/9)、
IB 電子情報館 (12/10、11)
参 加 費：事前登録 (10/31以前)
一般35,000円、学生10,000円、
通常登録 (11/1～12/2)
一般40,000円、学生12,000円、
当日登録
一般45,000円、学生15,000円

[問い合わせ先]
エコトピア科学研究所
教授 丹司敬義 052-789-4436

エコトピア科学に関する国際会議2011

内 容：世界的に著名な科学者、技術者による招待講演を行い、エコトピア科学の最新成果に関する討論、情報交換を行う

[ISET'S 11 市民公開講座]

12月11日(日)

場 所：IB 電子情報館 2階大講義室
時 間：13:20～17:00
テ ー マ：「環境とエネルギー」
対 象：小学生以上、一般
参 加 費：無料

[問い合わせ先]
エコトピア科学研究所 准教授 梅村知也 052-789-5485

12月17日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：11:00開演
参 加 費：無料

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

博物館コンサート

「ジャズでつづるクリスマス」

演奏曲目：「ホホワイトクリスマス」、「清しこの夜」、「Fly Me To The Moon」、
「A列車で行こう」他

出 演：長谷川智則氏 (サクソ)、牧野伸太郎氏 (ベース)、
松永有希子氏 (ピアノ)、加藤広祐氏 (ドラム) 他

12月17日(土)

場 所：博物館講義室
時 間：第1回 13:00～
第2回 15:00～
定 員：各回30名
対 象：小学生以上
(小学生は保護者同伴のこと)

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

進化にふれる

ハンズオン・ギャラリー

テ ー マ：「進化と学術標本」
内 容：テーマに関する解説・標本体験コーナー

12月23日(金)

場 所：博物館実験室
時 間：13:00～16:00
定 員：20名
対 象：小学5年生以上、一般
参 加 費：50円 (保険料)

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

ミクロの探検隊

テ ー マ：「ミクロの世界をのぞいて放散虫の進化に触れよう！
電子顕微鏡のふしぎ」

12月27日(火)

場 所：ES 総合館
時 間：12:00～17:30
対 象：高校生、大学生

[問い合わせ先]
高等研究院 052-788-6153

第3回アカデミーサロン：生徒・学生談話会

内 容：ES 総合館オープン記念講座「益川教授とのランチョンフォーラム」及び
「CP 対称性とは？—基礎講座—対称性と素粒子」

講 演 者：益川敏英 (本学特別教授)、
青木保道 (素粒子宇宙起源研究機構基礎理論研究センター准教授)

名大トピックス No.222 平成23年11月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

野依記念物質科学研究館 2階
ケミストリーギャラリー
(平成23年10月21日)



115 竹下重人と名高商行政文書

今年の8月10日に放送されたNHK総合テレビの番組「ファミリーヒストリー」で、俳優の竹下景子さんの父である竹下重人（1922-2005）の生涯が取り上げられ、そこで紹介された名古屋大学大学文書資料室の所蔵史料が注目を集めました。

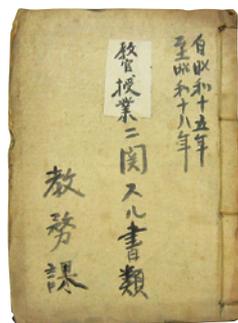
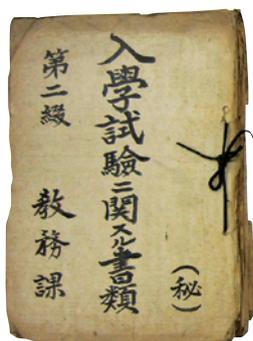
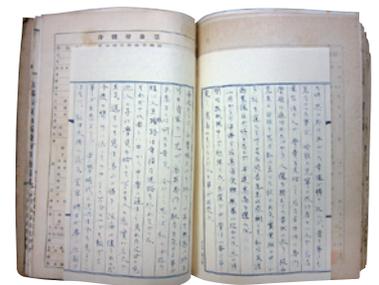
1922(大正11)年に長崎県の針尾島の貧家に生まれた竹下重人は、名大経済学部の前身にあたる名古屋高等商業学校(名高商、1920-1951)を卒業しました。満州国(1932年に中国東北部に成立した、日本が支配する国家)の官僚となって中国大陸に渡りますが、敗戦後はソ連によってシベリアに抑留、帰国後は偏見とたたかいつつ名古屋国税局に務めながら猛勉強し、弁護士になります。その後は税務訴訟を専門とする庶民派弁護士として活躍、名古屋弁護士会副会長も務めました。

大村中学校を一番の成績で卒業した竹下が名高商に進学したのは1940年4月、17歳のことでした。この時、竹下は

受験雑誌に寄稿した文章で、「私は今回九州の田舎中学より、中京の地に駒を進めまして、幸にも現役の身を以て天下随一の名商を陥落せしめた者であります。」と書いています。

番組で紹介されたのは、「昭和十七年九月卒業 第二十回卒業生名簿」という簿冊に綴じられていた身上調書に添付された「我が経歴」という文章です。ここで名高商1年生の竹下は、「私は大陸へ渡る。皇軍将士が尊い血潮で清めた東亜の新天地に進んで、新しき建設に微力ながらも一身を捧げ尽す覚悟である」と記しました。

この史料が綴じられていた簿冊は、名高商の行政文書です。1951年の名高商廃止後、残された600点を超える行政文書群が経済学部によって保存されてきましたが、このたび大学文書資料室へ移管されました。保存措置や整理を進め、可能なものはできるだけ早く一般公開していきたいと考えています。



2	1	3
4		

- 1 竹下家の家族写真。一番左が竹下重人、右から2番目が竹下景子さん。
- 2 名高商時代の竹下重人。戦時体制下の修業年限短縮のため、本来は3年のところを約2年半で卒業した。
- 3 番組で取り上げられた竹下重人の作文「我が経歴」。家が貧しく、本来なら進学を断念するところを、名古屋在住の母校の先輩からの経済的な援助があり、進学することができたと書かれている。
- 4 名高商行政文書。近代日本の高等商業教育の歴史を語る、学術的にも一級の史料である。